

令和3年度スポーツ庁委託事業

Special プロジェクト2020

「特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの
拠点づくり事業」成果報告書

令和4年3月
青森県教育委員会

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、青森県教育委員会が実施した「令和3年度 Special プロジェクト2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

1 地域が有する課題の状況

本県は、2026年の国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会青森大会の開催が内定し、障害者スポーツへの関心が高まっている。それに合わせて、令和元年度に「青森県特別支援学校スポーツ連盟」を設立し、障害のある児童生徒が、学校教育段階から生涯を通じてスポーツに親しむ態度を育成するための環境の充実が図られてきているところである。

県教育委員会では、平成31年2月に「青森県特別支援教育推進ビジョン」を策定し、基本方針において、障害のある児童生徒が、地域社会において、生涯を通じて教育やスポーツ、文化活動等に親しむことができるようにするため、地域人材を活用し、地域における活動を充実させるとともに、特別支援学校間のスポーツ・文化活動による交流を行い、生涯学習の基盤づくりに努めることを定めた。

また、各特別支援学校では、これまでも障害者スポーツ等を体育の授業の中に取り入れて、児童生徒のスポーツに親しむ機会を積極的に設けてきた。しかし、休日や卒業後の生活に視点を移すと、スポーツに取り組む者はごく一部であることが報告されるなど、学校での取組が日々の生活につながっていない状況がうかがえた。

そこで、本県では、県立特別支援学校に在籍している児童生徒の生涯を通じて継続的にスポーツに親しむ意識の向上を図ることと障害のある児童生徒が地域においてスポーツに親しむことができる環境づくりを目標に掲げ取り組むこととした。

これらを効果的に推進するため、県教育委員会ではスポーツ庁の委託事業を活用することとしたものである。

2 これまでの取組から

本県では、令和元年度からスポーツ庁の事業を受託し、障害者のスポーツの推進に向けて取り組んできた。その結果、「する」「みる」「ささえる」とそれぞれの形でスポーツに親しむようになり、技術の向上だけではなく、できたことが自信につながったり、コミュニケーション力が向上したりするなどの効果が得られた。さらに授業で体験したことが基盤となって、休み時間の友達との活動や休日の家庭生活の中に体を動かしたり、スポーツを観戦したりするなど、学校で学んだことを生活に生かす児童生徒が少しずつ増えてきた。

【技術の向上への思い】

・スポーツ大会に参加したい、もっとうまくなりたい、サッカー選手になりたいなどの感想が見られた。

【生活の変化】

学んだことを生活に取り入れる

【コミュニケーション力の向上】

・作戦を話し合う、成功を喜び合う、友達を応援する、児童生徒間で教え合うなど、コミュニケーション力の向上が図られた。

する

・放課後、休み時間、寄宿舎で友達と一緒にスポーツを楽しむ児童生徒が増えた。
・休日に家族とスポーツ観戦したり、動画サイトを見ながらダンスをしたりする児童生徒が増えた。

ささえる

【スポーツへの意識・意欲の変化】

・障害が重度でもひとりひとりが自分にあった形で体を動かす、スポーツに親しむ楽しさを感じた
・みんなで一緒に体を動かすことの楽しさを実感できた

みる

【自信】

・「できた」「うまいいった」ことが自信になった。
・気持ちを伝えることが苦手な児童生徒が、「もっとやりたい」「もっと見たい」など、自分の思いを言葉にできた。

3 事業の全体像

(1) 目的

障害者の継続的なスポーツの実施促進に向けて、本県における課題に対応して、障害者のスポーツの振興体制の強化と身近な場所でスポーツを実施できる環境の整備等を図るとともに、より広く障害者が参加できるスポーツ大会を創出する。

(2) 実施体制

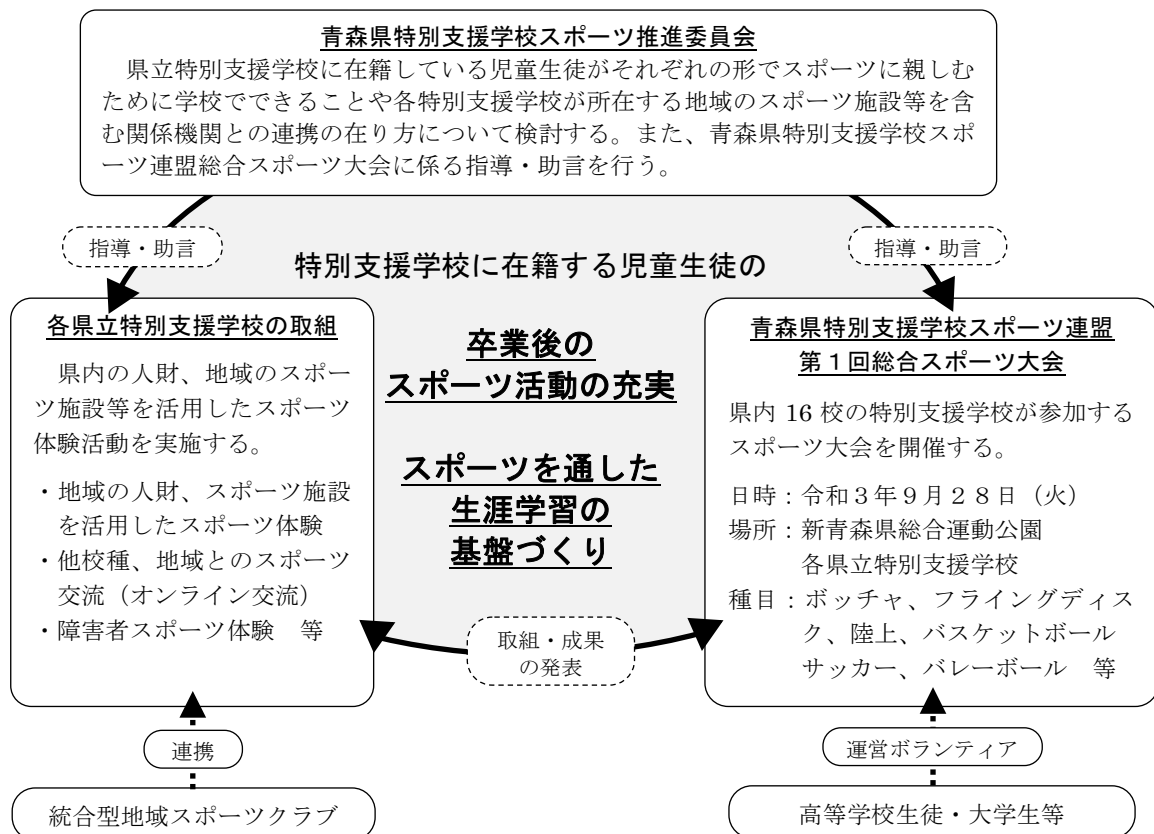
- ① 「青森県特別支援学校スポーツ推進委員会」を設置し、特別支援学校におけるスポーツ推進及び地域における生涯学習の基盤づくりに向けた検討と「青森県特別支援学校総合スポーツ大会」の運営に関する指導・助言を行う。
- ② 各県立特別支援学校の取組として、障害者スポーツの指導者等のスポーツの専門家を招き、体育の授業や部活動等において、障害者スポーツ等の楽しさを味わうとともに技術の向上を図る。
- ③ 特別支援学校に在籍する児童生徒の夢や志の実現の場として、盲学校、聾学校を除く特別支援学校15校を対象とする青森県特別支援学校総合スポーツ大会を開催する。

(3) 検討事項

- ① 学校教育における、障害者のスポーツの振興に係る地域との連携の在り方について
- ② 「青森県特別支援学校第1回総合スポーツ大会」について

(4) 本事業の全体構成

上記(2)の①～③の構成を図に示すと次のようになる。



4 事業内容の具体

(1) 特別支援学校におけるスポーツ推進及び地域における生涯学習の基盤づくり

① 方法

- ・ 県立特別支援学校 20 校を指定校とし、障害者スポーツの指導者を招き、体育の授業や部活動等において障害者スポーツ等の技術向上を図る。

(県内講師 1 名 * 2 時間 * 3 回)

- ・ 地域のスポーツクラブ等と連携を図り、学校施設を活用するなど、児童生徒の積極的なスポーツの参加を促し、生涯スポーツの基盤づくりに努める。特に実施するスポーツの種類、連携する機関等については、地域の実情に応じて各校が定める。

② 各校の取組

ア 本県の県立特別支援学校の現状と課題

これまでの取組を踏まえて、本県の県立特別支援学校の障害者のスポーツに関する現状と課題は以下のとおりである。(Table. 1)

Table. 1 本県の県立特別支援学校の障害者のスポーツに関する現状と主な課題

○現状	△課題
○障害種と在籍する児童生徒の実態に応じて、様々なスポーツに取り組んでいる。	△対外試合など他校選手との交流の機会がないなど、スポーツの経験が少ない。
○体力の向上や運動習慣の定着、健康の保持増進を目標に、障害の状態や発達段階等に応じて体育等の学習活動が行われている。	△基礎体力の向上。
○ボッチャやフライングディスクなど技術の向上が見られている。	△スポーツ活動をどのように継続していくか。
○中学部、高等部の生徒が小学部の児童にボッチャ等を教える機会を設定している。	△卒業後にスポーツに親しむ機会や場所が少ない。
○学校間交流や運動会等において障害者スポーツを取り入れ、児童生徒の関心も高まってきている。	△地域のスポーツクラブ等の利用につなげるなど、スポーツ活動をどのように将来の生活に結び付けていくか。
○スポーツに関する部活動に積極的に取り組んでいる学校がある。	△運動に対し、積極的に取り組む児童生徒と消極的な児童生徒に二極化している。
	△家庭生活において体を動かして余暇を過ごす児童生徒が依然として少ない。
	△競技スポーツとして取り組める生徒への指導が十分ではない。

イ 本県のスポーツに関する取組の方向性

本事業では、「自校におけるスポーツを通じた生涯学習の基盤づくり」と「地域のスポーツクラブ等の地域資源との連携・協力」の2点について取り組むこととした。(Table. 2)

いずれの学校も在籍している児童生徒の卒業後のスポーツを通じた生涯学習の基盤づくりへの効果を期待しているものであるが、このような取組が、地域のスポーツ活動の充実につながるとともに、地域のスポーツ活動の充実が特別支援学校に在籍している児童生徒の卒業後の充実した生活につながるといった相乗効果をもたらすことを期待して取り組んでいる。

Table. 2 本県のスポーツに関する取組の方向性と期待する効果（令和3年度）

【自校におけるスポーツを通じた生涯学習の基盤づくり】

- ・授業や部活動において技術や専門的知識を身に付け、大会参加等により味わった達成感や楽しさが卒業後のスポーツ活動の基盤になるのではないかな。
- ・ボッチャ甲子園や県特別支援学校総合スポーツ大会等、大会への参加や参加を目指して取り組むことで、技術が向上するとともに、スポーツの楽しさを味わい、スポーツに親しむようになるのではないかな。
- ・障害者スポーツ等を体験する機会を通して、児童生徒自身が興味関心をもつスポーツを見つけ、卒業後も継続して親しむためのきっかけとなるのではないかな。
- ・チームスポーツなどを通して、他者と喜びを分かち合う機会となり、コミュニケーション力の向上につながるのではないかな。
- ・プロスポーツに直に触れることで、競技に関心をもち、「プレイする」「応援する」「観戦する」など、一人一人に合った形でスポーツへの親しみ方を見つけることができるのではないかな。
- ・これまで学んだスポーツに関する知識や技能を学校間交流で他校の児童生徒に伝えるなどすることで、社会性の向上や豊かな人間性を育むことにつながるのではないかな。
- ・小学部段階から障害者スポーツに親しむ環境をつくることで、障害者スポーツ大会等へ参加する意欲やスポーツに親しみながら健康的に生活する態度の育成につながるのではないかな。

【地域のスポーツクラブ等の地域資源との連携・協力】

- ・地域のスポーツクラブの指導者を招へいすることで、地域スポーツとの出会いとなり、地域のスポーツクラブ等への参加意欲が高まるのではないかな。
- ・卒業生が所属している社会人チームと交流することで、卒業後もスポーツに親しむイメージをもったり、スポーツクラブへの参加を身近に感じたりするのではないかな。
- ・地域のスポーツに関する専門的知識をもった方の指導を受けることで、体を動かすこと、スポーツをすることの楽しさや喜びを感じ、余暇の充実や生活にスポーツを取り入れようとする意欲の育成につながるのではないかな。
- ・休日に活用できるスポーツ施設等の情報を調べたり、部活動等において外部のスポーツ施設を活用したりすることで、休日等、体を動かす場を知ることができ、利用につながるのではないかな。
- ・地域におけるスポーツイベントの基礎作りとして、学校主催の障害者スポーツ大会を開催することで、地域の活性化につながるのではないかな。
- ・障害者スポーツを含むスポーツ指導ができる教員の専門性を高めることができるのではないかな。
- ・家庭や地域などの身近な場所で運動や各種スポーツができる環境を整えることが、児童生徒だけでなく、地域の方々の健康と生きがいにもつながり、生涯スポーツの推進につながるのではないかな。

ウ 各校の取組内容

各校が連携した機関等の内訳は、Table. 3のとおりである。地域のスポーツクラブとの連携を図っている学校が7校あり、卒業後の生活を見据えて、将来利用できるスポーツクラブ等につなげていきたいといった考えの下に連携を進めている様子が見えてきた。また、卒業生が所属しているスポーツクラブと交流する機会を設定し、生徒自身が卒業後のスポーツに親しみながらの生活を具体的にイメージすることができるようにしている学校もあった。

昨年度と比較すると、地域の小・中学校・高等学校の部活動との連携を図っている学校が増えた。これは、部活動等一部の活動ではあるものの、これまでの取組で技術が向上し、対外試合など他者と競い合う場を設定し、より一層の技術の向上や社会性の向上を目指して取り組んでいる様子が見えてきた。

さらに、その他として、競技スポーツではないが、今年度もダンスクラブやヨガ教室など、気軽に体を動かすことができる施設と連携しており、障害が重度の児童生徒も体を動かすことに喜びや達成感を感じることができ、生活に直接結びつくような内容に取り組んでいる学校も複数あった。

Table. 3 主な連携機関

連携機関	実施校数（複数回答）
地域のスポーツクラブとの連携	7校
地域の福祉機関との連携	4校
地域の小・中学校・高等学校の部活動との連携	3校
地域の他の特別支援学校との連携	3校
地域の町内会・老人会等との連携	3校
その他	5校

招へいしたスポーツの指導者等の所属する機関は Table. 4 のとおりである。今年度と昨年度とで大きな違いはないが、視覚特別支援学校と聴覚特別支援学校を対象に加えたことで、それぞれの障害種に特化した障害者スポーツ関連団体の指導員等を招へいして取り組んでいる学校があった。また、招へいする指導者や団体は同様でも、体験する時間を長くしたり、練習や体験だけではなく対戦形式の内容を設定したりなど、昨年度の取組を生かし、よりステップアップして取り組んでいる学校が多かった。

さらに、各校とも競技スポーツだけではなく、障害の程度に関係なくスポーツに親しむことができるように、地域のダンススタジオのスタッフなど、楽しく体を動かすことを目指した取組も継続して行われた。

Table. 4 招へい指導者所属機関一覧

機関分類	具体的機関名
障害者スポーツ関連団体	・青森県フロアバレーボールクラブ
	・日本デフ陸上競技協会
	・青森県ボッチャ協会
	・青森県障害者スポーツ指導員会
	・青森県障害者フライングディスク協会
	・青森県障害者スポーツ協会
地域統合型スポーツクラブ	・Hachinohe Club
プロスポーツチーム	・ヴァンラーレ八戸
教育機関	・八戸学院大学
	・青森大学新体操部
	・青森山田高等学校新体操部

その他

- ・フィットネスクラブ八戸
 - ・MATSURI SPORTS DAYS (ヨガ教室)
 - ・エアロビクス教室
 - ・ステップエアロビクス
 - ・トレーニングジム REXSISS&C
 - ・鮫TTC (卓球クラブ)
 - ・ホリデースポーツクラブ弘前
 - ・JACK BOX (ヒップホップダンス)
-

エ 児童生徒の変容

豊富な経験と優れた技術をもった指導者や講師の方々の基礎基本の指導や児童生徒の実態に合わせた指導により、技術の向上やスポーツが有する楽しさや喜びを味わうことができた。ヨガやエアロビクスなどは、体を動かすことの楽しさや爽快感を味わうことができ、児童生徒の体を動かすことの知識を深めるとともに意欲の向上にもつながった。

それぞれの指導者や講師の方から、繰り返し練習することや毎日続けることの大切さを聞き、家庭等において運動を取り入れようとする児童生徒も少しずつ増えてきている。

各校ともこれまでの取組を基盤としながら継続して取り組んだことで、技術の向上だけではなく、自分から指導者へ聞きに行ったり、これまで学んだことを下級生に教えたり、グループ内で教え合ったりするなど、児童生徒同士で教え合う様子が多くの学校でみられた。

特にボッチャ競技に取り組んでいる学校では、ボールの位置関係を自分で考え、チームとして作戦を練るなどしながら競技する様子が多くみられ、技術の向上だけではなく、コミュニケーション力の向上やスポーツに真剣に向き合う姿がみられた。また、チームの仲間だけではなく、観戦している時も拍手を自分からしたり、「ナイス」と声を掛けたりするなど他者を意識した感情を言葉で表現する様子が見られた。

児童生徒からは「〇〇が楽しい。」「もっとやりたい。」などといった意欲の向上がうかがえる感想や「フライングディスクがまっすぐ飛ぶようになった。」「シュートの成功率が上がった。」「去年よりも上手にできた。」など、技術の向上を自ら感じている感想が多くみられた。また、指導者から教えてもらったことを踏まえながら、次回頑張りたいことや取り組みたいことを文章にするなど、学んだことを生かして具体的な技術の向上を目標にしようとする感想がみられた。

また、他校との交流試合や総合スポーツ大会への参加など、対戦という経験は、「試合に勝つ」という明確な目標ができ、そのことにより、練習内容の工夫につながったとともに、試合の際の職員や同級生等の応援は、一層ゲームの面白さや勝敗に対する意欲の高まりにつながった。

オ 地域スポーツ活動の充実と生涯学習の基盤づくりについて

本事業の取組によって、各校とも様々な機関とのつながりを構築できたことは、特別支援学校に在籍している児童生徒がスポーツを通して地域と関わっていくためのきっかけになったとともに、今後の基礎づくりとなった。

特に今年度は、部活動ではあるが、地域の外部施設を利用して活動したり、授業においてスポーツクラブについて調べたりするなど、生徒が直接地域のスポーツ施設、スポーツクラブに触れる機会を設定した学校があった。そのことにより、生徒によっては、自宅からの距離や交通手段について考えたり、話題にしたりする様子がみられ、スポーツクラブ等が身近にあることを認識することができる機会となった。

また、地域交流等を通して、スポーツに関する取組を地域に情報発信することは、特別支援学校に在籍している児童生徒の理解の促進につながるため、今後も積極的に発信していきたいといった意見もみられた。

一方で、依然として学校教育段階での取組をどのように地域につなげていくのかについての具体的取組が課題であると捉えている学校が多かった。

(2) 青森県特別支援学校第1回総合スポーツ大会の開催

① 経緯

一昨年度は、県内特別支援学校（知・肢・病）の16校を対象に青森県特別支援学校総合スポーツ大会（プレ大会）、昨年度は青森県特別支援学校オンラインスポーツ大会を開催した。

今年度は、これまでの経験を生かして、第1回大会として、集合型とオンライン型のハイブリット大会を開催する予定で準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の感染予防の観点から、集合型の競技の実施は難しいと判断し、オンラインのみの実施とし、第1回総合スポーツ大会を開催した。

② オンライン大会に向けての諸準備

大会形式の決定は、9月28日の開催日から約1か月前の8月中旬であったものの、前年度のオンライン大会の経験と計画段階からオンライン型も並行して計画していたことから大きな混乱もなく大会を開催することができた。

③ 大会概要

令和3年9月28日（火）に県内12校の特別支援学校をインターネットでつないだ「青森県特別支援学校第1回総合スポーツ大会」を開催した。

ア 実施競技

バレーボール、フライングディスク、ボッチャの3競技を実施した。各競技のルールは、昨年度の実績を参考にして定め実施した。特にバレーボールは、より相手を意識することと、バレーボールの本来のルールにできるだけ近い形で実施できるよう、実施方法を大幅に変更して実施した。

(Table. 5)

Table. 5 オンライン競技と主なルール

オンライン競技名	主なルール
オンラインバレーボール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6人1組の対戦形式 ・ 基本的なルールは対面型と同様 ・ サーブと三段攻撃を分けて行う ・ サーブは、相手コートに入れば1点、入らなけ

	<ul style="list-style-type: none"> れば相手に1点 ・サーブの結果に関わらず、レシーブ側のチームにボールを投げ入れ、攻撃する ・得点は、三段攻撃のうち <ul style="list-style-type: none"> 1回で相手コート内に返したら1点 2回で相手コート内に返したら2点 3回で相手コート内に返したら3点 自分のコートにボールを落としたり、相手コート内に入らなかったりした場合は、相手に1点 ・25点の3セットマッチで競う
オンラインチャレンジボッチャ	<ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由クラスとそれ以外のクラス分け ・5人1チーム ・八角的を使用しての点数制 ・1人5球（肢体不自由クラスは3球）で5人全員の合計得点で競う
オンラインフライングディスク アキュラシー	<ul style="list-style-type: none"> ・5人1チーム （4人は距離5m、1人は距離7m） ・1人4投で5人全員の合計得点で競う

その他、陸上競技（30m走・50m走）は、期間を設定し、事前に記録を測定し、大会ホームページにてランキング発表をした。また、チャレンジ競技としてチャレンジバレーボール、チャレンジサッカー、チャレンジボッチャ、チャレンジフライングディスク、チャレンジバスケットボールを設け、成功回数等に応じて級認定をした。（Table. 6）

Table. 6 事前記録競技と主なルール

競技名	主なルール
陸上競技	<ul style="list-style-type: none"> ・30m走、50m走の個人競技 ・それぞれの距離に以下のクラスを設定 <ul style="list-style-type: none"> ①知的 ②上肢・下肢・体幹（機能障害等） ③脳原性疾患 ④車いす ・大会ホームページにランキング発表
チャレンジサッカー	<ul style="list-style-type: none"> ・個人競技 ・ゴールまでの距離5mと10mの2クラス ・1人5本でゴール数に応じて級認定
チャレンジバレーボール	<ul style="list-style-type: none"> ・個人でのパスラリー ・1分間の合計回数で競う ・合計回数に応じて級認定
チャレンジボッチャ	<ul style="list-style-type: none"> ・個人競技 ・肢体不自由クラスとそれ以外のクラス分け ・八角的を使用しての点数制 ・1人5球（肢体不自由クラスは3球）で合計点数に応じて級認定
チャレンジフライングディスク	<ul style="list-style-type: none"> ・個人競技 ・距離3m（ディスリート3）、距離5m（ディスリート5）の2クラス ・1人10投でゴール通過回数に応じて級認定

チャレンジバスケットボール

- ・個人でのフリースロー
- ・ゴールの高さ、距離等でクラス分け
(260cm、305cm、車椅子)
- ・1人10本のフリースローでゴール数に応じて
級認定

※級認定の競技は、後日各人に認定証を配布した。

イ 参加人数

当日は115人の生徒がオンラインで対戦した。また、890人の生徒が事前に記録を測定するチャレンジ競技に参加した。(Table. 7) 特に、チャレンジ競技は、昨年度の723人のエントリーに対して、今年度は890人と挑戦する生徒が大幅に増加した。

Table. 7 参加状況

競技名		人数
オンライン競技	オンラインバレーボール	29人(2チーム)
	オンラインチャレンジポッチャ	56人(11チーム)
	オンラインフライングディスクアキュラシー	30人(6チーム)
	オンライン競技合計	115人
陸上競技		22人
チャレンジサッカー		251人
事前記録競技	チャレンジバレーボール	43人
	チャレンジポッチャ	181人
	チャレンジフライングディスク	193人
	チャレンジバスケットボール	200人
事前記録競技合計		890人
参加人数合計		1005人

④ 開催後の感想等

ア 生徒を対象とした事後アンケート

大会終了後に参加した県立特別支援学校の生徒を対象に事後アンケートを実施した。その主な項目の回答内訳は Table. 9 のとおりである。また、自由記述には、「またやりたい。」「来年もやりたい。」などの肯定的な記述がみられた一方で、「アリーナに行きたかった。」「コロナでも集まって試合がしたい。」「外に出て、他の生徒と一緒に競技に出たかった。」などの集合型の大会を希望する記述が多かった。さらに、「競技を増やしてほしい。」「もっといろいろな競技に参加したい。」など、今後、一人でも多く

の生徒が参加できるための大会にするために検討すべき点となる記述もみられた。

Table. 9 事後アンケート回答内訳（生徒対象）

主なアンケート項目	回答内訳	
1. スポーツ大会を楽しみにしてましたか？ (n=373)	楽しみだった	57%
	ふつう	39%
	楽しみではなかった	4%
2. 競技に参加してどうでしたか？ (n=269)	楽しかった	63%
	ふつう	34%
	楽しくなかった	3%
3. この1年間で技術は高まりましたか？ (n=244)	高まった	29%
	少し高まった	41%
	わからない	30%
4. 映像で見てどうでしたか？ (n=318)	楽しかった	58%
	ふつう	39%
	楽しくなかった	3%
5. 今後もスポーツを続けたいですか？ (n=394)	続けたい	66%
	このままで良い	29%
	続けたくない	5%

イ 教員を対象とした事後アンケート（各校代表者）

本大会を計画、開催するに当たり、各校から招集された教員を対象として実施した事後アンケートでは、感染予防対策としてオンライン型のみで開催したことに対して肯定的に捉えている意見があった一方で、大会形態の決定時期や一人でも多くの生徒が参加できるように競技数や競技方法などを改善する必要性を訴える意見もあった。また、「一堂に会して競技ができた方がよい。」など集合型の大会を望む意見もみられた。



バレーボール競技（2校同時画面）

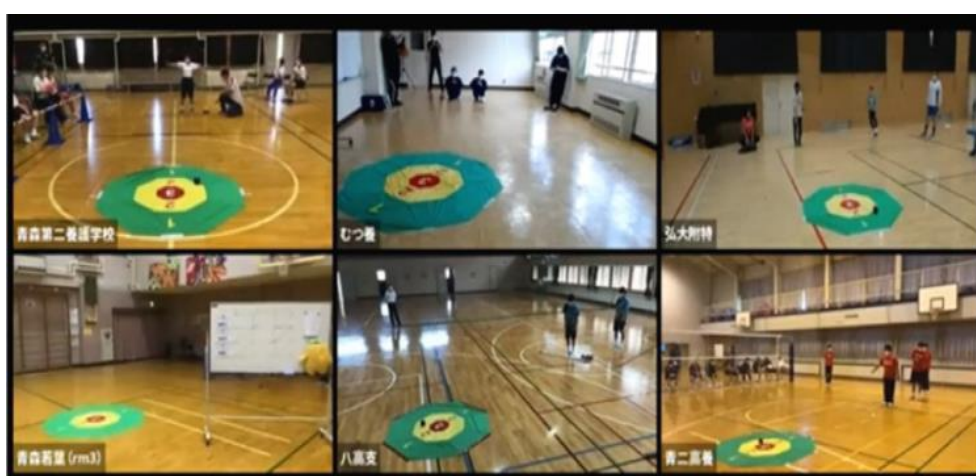


「光の方へ」

県立弘前第一養護学校高等部生徒作品
（第1回総合スポーツ大会ポスター原画）



フライングディスク競技（4校同時画面）



ボッチャ競技（6校同時画面）

（3）青森県特別支援学校スポーツ推進委員会について

本事業では、特別支援学校に在籍している児童生徒のスポーツに関する取組の充実を図るために、有識者を委員として任命し、以下の目的で推進委員会を開催した。特に今年度は、学校でのスポーツに関する取組と地域とをつなげるために、総合型地域スポーツクラブの担当者を委員として招へいし、推進委員会を開催した。

① 目的

県立特別支援学校に在籍している児童生徒がそれぞれの形でスポーツに親しむために学校でできることや各特別支援学校が所在する地域のスポーツ施設を含む関係機関との連携の在り方について検討する。また、青森県特別支援学校総合スポーツ大会に係る指導・助言を行う。

② 委員構成

大学准教授、公益財団法人青森県スポーツ協会、NPO法人青森県障害者スポーツ協会、青森県障害者スポーツ指導員会、青森県高等学校体育連盟、統合型地域スポーツクラブ、青森県特別支援学校スポーツ連盟、青森県特別支援学校校長会、青森県障害福祉課、青森県教育庁スポーツ健康課、同生涯学習課

③ 検討内容

ア 第1回推進委員会 令和3年6月25日（金）

第1回推進委員会では、第1回総合スポーツ大会についての検討と各機関で取り組んでいる障害者のスポーツ推進に向けた取組についての情報共有をした。

特に総合型地域スポーツクラブの担当者から、本県の総合型地域スポーツクラブの設立状況と活動状況として、コロナ禍で活動を自粛したり、縮小したりしている団体はあるものの、令和3年度時点で33市町村に42団体が設立されていることと、活動状況として競技志向のもの他に、多世代が交流できるようなスポーツやボッチャ等の障害者が参加できるようなスポーツを実施している団体があることが情報共有された。

また、弘前大学教育学部附属特別支援学校で取り組んでいる地域に根ざしたスポーツに関する取組の報告もあり、各校が今後どのように地域と連携しながらスポーツを推進していくのか具体的に考える機会となった。

イ 第2回推進委員会 令和3年12月17日（金）

第2回推進委員会では、第1回総合スポーツ大会の報告と学校での取組を校外にどのようにつなげていくのかについて検討をした。

その中で、各機関の連携の必要性について話題になり、障害者のスポーツ活動を推進するためには、総合型地域スポーツクラブや福祉分野も含めて、それぞれの機関で何ができるかを役割分担した上で、連携を図っていくことが重要であることが確認された。

5 本事業の成果と課題

(1) 成果と課題について

本事業の成果としては、大きく次の3点が挙げられる。

- ・特別支援学校に在籍している児童生徒が目標とするスポーツ大会を継続して開催していくための基盤を作ることができた。
- ・特別支援学校に在籍している児童生徒のスポーツに対する意欲・技術・知識が向上し、継続的にスポーツに取り組もうとする態度が育成された。
- ・障害のある児童生徒の理解が深まり、地域のスポーツに関する活動への参加や地域ネットワーク形成のきっかけとなった。

特に今年度は、総合型地域スポーツクラブの担当者を推進委員として招へいしたことで、特別支援学校側が各地域のスポーツクラブの状況を把握することができたとともに、特別支援学校の状況や障害のある児童生徒の卒業後のスポーツに親しむ環境について情報共有することができた。学校教育で学んだことを将来の生活にどのようにつなげていくのかについて具体的な方策を打ち出すことはできなかったが、今後連携をしていくためのきっかけになったと捉えている。

一方、課題としては、学校でのスポーツに関する取組を地域のスポーツ活動につなげる具体的な方策について示すことができなかったことである。これまでの取組で学校でのスポーツに関する取組が充実し、児童生徒のスポーツに親しむ意欲も高まってきた。推進委員会でも総合型地域スポーツクラブの担当者から情報提

供してもらったり、連携の重要性について話題になったりと学校と地域が互いにやっていること、できそうなこと等を共有しながら連携について検討してきた。今後も障害者の地域におけるスポーツ環境の構築に向けて、学校での取組を校内だけで終わらせるのではなく、広く地域に発信するとともに、学校ができることは何か、地域にはどのような資源があり、どうつなげていくのかについて各校で考えていく必要がある。

(2) 今後の展望について

今年度は、オリンピックやパラリンピックと関連付けたことでこれまで以上に児童生徒の興味・関心を高めることができたと考える。

スポーツの指導員やプロスポーツ選手からの指導は、児童生徒だけではなく、教員にとってもこれまでの指導を振り返り、具体的な言葉掛けや補助の仕方を学ぶことができ、日頃、学校という人的、設備的に限られた環境で指導している中では思いつかないような視点の指導方法や指導内容を知ることができる機会となった。今後は、教員自身が学んだことを日々の指導にも生かしていくことが期待される。

本事業で複数年継続して取り組んできたことで、児童生徒からは「やってみたらできた。」「意外と楽しかった。」などの感想が多く聞かれ、児童生徒の中に新しいことに挑戦しようとする意欲が生まれてきたと考える。本事業はスポーツに特化した取組ではあるが、挑戦する気持ちを育むことはスポーツ以外の場面にもつながるものと考えため、今後も継続して取り組んでいければと考える。

特別支援学校に在籍している児童生徒にとって、スポーツに親しむことは、健康的な生活を送ることができるだけでなく、余暇の充実にもつながるなど将来の生活の質が向上する上で必要なことであると捉えている。小学部段階の早い時期からスポーツに親しむ環境を作り、児童生徒一人一人に合ったスポーツへの親しみ方を構築し、総合スポーツ大会への参加や将来のアスリートの育成につなげていければと考える。

本事業は今年度で終了となるが、今後はこれまでの取組で培ったことを生かしながら取り組んでいきたいと考える。